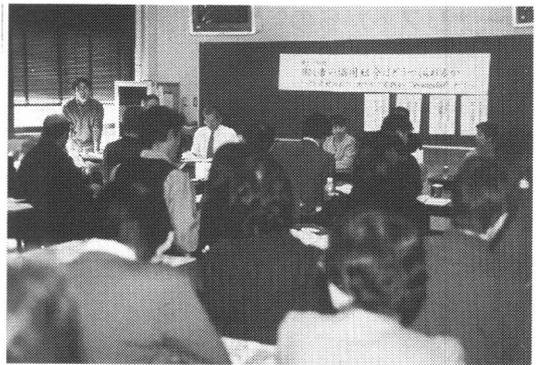


第7分科会

働く者の協同組合は どうつくられるか

—21世紀の新しい働き方の
実践的"evangelist"として—

岡安 喜三郎（日本労協連）



分科会開催趣旨

（よびかけ文より）

働く者の協同で新しい事業とその主体組織を生み出そうという大きなうねりがあります。社会や地域に役立つ仕事をしたいという人たちが、自らが出資し自らが労働し、みんなで経営を共同管理する「協同労働の協同組合」（労働者協同組合）です。ここには「働くことは雇用されるもの」という高度成長以来の伝統的考え方ではない、新しい働き方が生まれています。

分科会では、実際にワーカーズコープを立ち上げた経験や、労働者協同組合（事業団）の事業所で全組合員経営をすすめ経営改善を図っている経験とともに、生協や協同組織、NPO組織で働く人たちの協同の経験を交流し、お互いに学びながら、「働く者の協同」の未来像を描いていきたい、そういう分科会にできればと願っています。

新しい働き方は、新しい生き方であるとともに、二十一世紀の市民社会を非営利協同の立場から促進するものとして、みんなで考え行動していきましょう。

全体印象

第7分科会は、教室から溢れる60名以上の参加者で開催されました。参加しようと足を運ばれても入れなかった方には全く申し訳なく思います。

12人の報告者は、組織の立ち上げから現在に至るまでの先駆者としての苦労、その中で培われてきた信念などを豊かに報告しました。それぞれ立ち上げ動機には違うものがあるものの、「雇われない働き方」「協同労働」でがんばっている姿が浮き彫りにされ、中身の濃い学び合いができたと思います。

分科会は、主体的な参加が目立ち、普段の仕事の中での率直な疑問や思いを出しながらの活発な討論となりました。田中琢磨さん（労協センター事業団藤沢事業所）は「私は、協同組合という組織でどういった働き方をして、また、どういった働き方を創造して伝えていくのかという観点で参加した」と述べています。

とりわけ、普段では交流することのない、たとえばセンター事業団の事業所の人とワーカーズ・コレクティブの人とかが、一堂に会して現状を出し合い、新しい働き方を探る討

パネリスト

村山節子（ワーカーズコープ・キュービック）
 石郷岡しずか（労協センター事業団ワーカーズコープあぞみ）
 高岡民子（労協センター事業団ワーカーズコープ味彩）
 藤木千草（ワーカーズ・コレクティブ生活工房まちまち）
 竹下きいこ（石巻地方中高年雇用事業団）
 荻野工（島根中高年事業団）
 近藤蕙子（労協センター事業団川口事業所）

村上盟（長野中高年雇用福祉事業団）
 倉内博海（労協センター事業団奈良第2出張所）
 橋本光子（ワーカーズコープ愛コープ港北）
 星邦彦（労協センター事業団介護サービスもみじ）
 大西玖美子（労協センター事業団きょうとケアワーカーほんわか）
コメンテーター
 神田嘉延（鹿児島大学）
コーディネーター
 岡安喜三郎（日本労働者協同組合連合会）
 古村伸宏（労協センター事業団）

議は、さしずめ「他流試合」の様でもあり、緊張感を持ちながらも大きなヒントが得られた分科会になったのではないのでしょうか。

この報告集が出るころは21世紀になっています。分科会の内容はとてもこの報告では伝え切れません、ぜひとも資料集（「いま『協同』を拓く2000全国集会－資料集」）と合わせてお読みください。

そして、古村さん（労協センター事業団）が最後に述べたように、2年後の協同集会を待つことなく、このように実践を交流する幅広い「『伝道者』のネットワーク」の必要性を感じた第7分科会でした。

各発表の概要

最初、岡安から分科会の趣旨と基本資料の紹介を行いました。私たちの新しい働き方である協同労働は、ICA（国際協同組合同盟）の声明＜定義、価値、原則＞に合致した内容であること、ICAの原則は今までも何回か改定されてきており、今後も私たちの実践がICA原則を豊かにする道にもなっていること、また、私たちの運営には理念と言われるもの、

すなわち価値や社会的使命、原則等が必要であり、それはスペインのモンドラゴンのような大きな協同組合でも同じであること、そして、ICAもILO（国際労働機構）も協同労働の協同組合に注目していること、したがって分科会のテーマに敢えて"evangelist"（「伝道者」）を使ったこと、等々です。

村山さんは女性の新しい働き方を求めて、コープかながわの理事や委員の経験者が生協に関わって活躍の場を創り出すための「ワーカーズコープ・キュービック」を立ち上げた経験を報告しました。出資金一人10万円（夫に相談なく出せる金額）を出し合い始めても最初は仕事がなく、事務所も会員の自宅からでした。やれることは「やってみます」とつづけ、食堂、リサイクルショップ、草取りなど、いまでは生協外も含め「すき間の仕事」を「何でもやっている」（4事業部18グループ）の多岐にわたる仕事の展開が報告されました。

石郷岡さんは、委託を受けた保育園の仕事から、地域に子育てネットワークを拡げてきた保育士たちの仕事おこしを報告しました。少子・高齢化の中で、委託はその可否や委託

昼食後、神田さん（鹿児島大学教授）から、鹿児島での経験を踏まえながら今までの発言に対するコメントがありました。現在は組織が大きくなる中での矛盾であり、組織的にも地域に入っていく上でも、小さいことの意味を考えていく時期に来ていること。事業の改革運動は一人ひとりが小さな単位で責任をもってすすめることになるが、仕事の意味をつかむ上でも教育活動の伴うことの重要性を強調しました。

倉内さんは病院の清掃改革が職場改革でもあったことを、働き方、働く人どうしの関係で報告しました。この清掃改革完成宣言までに、労協で働くことを決めた人たちしか残らず効率的になった一方で、例え利己的な人でも残すことができなかつた悔いは残っていることの報告の後、生きがい・働きがいと言っても生活できる給与とは言い難い中で、どんなのが協同労働なのかをぜひ議論したいと発言しました。

橋本さんは、コープかながわの有償ボランティアでホームヘルプサービスが母体となって始まったワーカーズコープ愛コープについて報告しました。10年前に県に一つの愛コープとして始まったが、500名の規模になり、また介護保険の対応が行政区ごとに異なるのを期に18の支部が独立、港北支部もワーカーズコープ愛コープ港北として再出発したこと、2000年12月には「特定非営利活動法人 愛コープ」設立を予定していることが報告されました。

星さんは、「介護サービスもみじ」の経験から、立ち上げコンセプトやワーカーズ・コープの原点の大切さを報告しました。立ち上げ直後の宣伝にもコンセプトが重要だったし、事業が拡大してくる中で組合員に不公平感がでたときなどでも、皆で話し合う時、「言いた

いことがいえる」ことが「文句を言うだけ」になりがちなので、「利用者の立場に立つ、まごころ」「どんな仕事もよろこんで」などの、きちんとした共通に理解できるコンセプトが運営上大切であった、今後、ボランティア組織やNPO、行政（相模原市）等との連携を強めていきたいとの発言がありました。

大西さんは、7人から2人へ、そして現在21人の組合員となった「きょうとケアワーカーほんわか」の5年間を振り返り、コミュニケーション、特に顔の見えるコミュニケーションが困難ではあるが大切であり、それがよい仕事につながると報告しました。また、ヘルパー講座に出会い、その働き方に新鮮味を、特に自分の考えを取り入れられることにやりがいを感じた、これらは自分の生きかたを変えてくれたのではないかと発言しました。

討論～論点紹介

12人の報告後の討論を紹介します。臨場感を保つように発言を追ってみました。上記3の各発言と合わせて振り返ることによって数々のヒントが得られると思います。

【労協で働く現実から】

○みんなが平等であるということは議決権等ではそうだが、責任は分担するもので、軽重はある。もちろん話し合いは限りなくおこなうが、効率的に仕事をしていけば、土曜休みも可能だし、ハンディのある人と共に働くことができる。現にいま2人働いている。

○清掃は一般企業との競争だ。仕事が悪ければ、また委託料が高ければ他の業者が入ってくる。私たち労協でなければ出来ないことをやること。これを目指している。

ところ。

○私たちの事業所では不満が出てないと思う。やりがいをもって仕事をしているし、生活を支える目的の人にはたくさん仕事が入る。会議でも不満はでないし、お茶のみ話の時にも出ないので。

【皆でやれる規模と連帯組織の必要性】

○みんなで作るというのは20人位が限度ではないか。100人とかになると仕組みが必要になると思う。ワーカーズ・コープも500人になって18に分けたと言うし。

○いろいろ考えさせられて逆に聞きたいが、センター事業団とはどういう組織なのでしょう。連合会組織だと思いの、ボーナスと成績の話など、各事業所が本部に雇われていると感ずるが。

○センター事業団は連合会ではなく、全国に90の事業所を持った一つの事業体組織です。就労確保の事業と運動を実践的に進める役割をもって設立された。歴史的な役割の上に立って現在組織改革を検討中です。

○生協などの経験を踏まえて言えば、一般的に各単位の組織が横に連帯する意思のない中での連帯組織（連合会）は無駄な組織になると思っている。横の連帯があつて初めて意味のある連合会を作ることができると思う。

○私は月150時間の在宅ケアと保険請求事務をやっている。請求事務は「時給を」と言われているが、なるべく現場に厚くしたいのでボランティアでやっている。会議もそう。請求事務一つとって見ても連合会や本部がなければ世の中の変わりについていけなくなる。私たちの仕事の為にも必要である。

【雇われるのではない協同の力】

○ここに来て、協同組合が分かったような気

がする。物流を一生懸命にやって、給与が上がって、自分たちはプロなんだと言いたい、10年間上がってないし、若い人たちも「結婚したらやっていけない」と言う。今まで、事業所の盛り上げに欠けていた、協同も弱かった、また、センター事業団から雇われている感じだったが、これではダメだ。帰ってどう話していいかイメージは湧いていないが、話をしないとダメになるのだろうと感じた。

○私は茨城の生協も入った連合会の一員だが、生協は単に物を買ったり売ったりの世界から、組合員の自己実現のための組織になろうとしている。大きな目で生協を見てほしい。

○雇用による組織維持力は、指揮命令と違反時のペナルティ、これで競争に勝つこと。この原点は軍隊組織。協同組合と言えども歴史的にはこのマネジメント・ノウハウしかなかった。協同労働がいわば地域の中で市民感覚のまま事業を行う組織を作り上げる力になる、このことに確信を持つことではないか。

【コメント】

- ・ 大変勉強になった。協同組合のあり方それぞれが問われながら議論がされたと思う。
- ・ もっと、他の協同組合やNPOの人たちの参加が多ければ「協同労働」の話が深まったのではないだろうか。
- ・ 労協で生活していく、このことは社会的な力、民主主義に力が必要になると思われる。
- ・ 新しい理念、壮大な展望の下で、この運動を進めていくとき、ぜひ、法の整備、「協同労働協同組合法」の法制化を、もっと積極的に言っていこう。

【最後に】

カンパネーラへのカンパが18,000円になった報告と御礼がありました。